

インド空軍博物館

特許技監 櫻井 孝

インドは軍事大国である。毎年1月26日の共和国記念日には、ニューデリーの大統領官邸前に伸びる大通りで華やかな式典が催されるが、そのプログラムの一部として地上を戦車が走り、空を戦闘機がフライパスしていく。

インド空軍はインド独立前の1932年にスタートした。独立前は当然のことながら英国製の軍用機を使用していたが、独立後はいわゆる西側、東側両陣営の軍用機を取り混ぜて使用してきた。主力戦闘機はソ連製、補助戦闘機は英国製や国産なんて珍しいことがインド空軍では起こっていたのである。これは長所もあれば短所もある。ネジ1本みても互換性がなさそうで、前線などで緊急修理するときは困るんじゃないかと思われる。

話は少しそれるが、インドに旅行した時の重要な注意事項のひとつとして、空港では写真撮影厳禁、というのがある。インドの空港は軍民共用のところが多い。ニューデリーにあるインディラ・ガンジー国際空港もパーラム空軍基地とくっついていて、ターミナル近くにソ連製の巨大な空軍輸送機が駐機しているのを見たことがある。南のゴアに行った時は、自分の乗った旅客機が離陸直前に滑走路の手前で止まるのでどうしたんだろうと窓の外を見ていたら、目の前の滑走路に垂直離着陸機のシーハリヤー戦闘機が2機、編隊を組んだまま降りてきた。垂直離着陸機だから「空から降ってきた」という方が表現としてわかりやすい。これにはさすがに驚かされた。ウダイプールに行った時も、空港の誘導路の左右には掩体壕が造られていて、軍用機が隠されていた。とにかく空港での写真撮影はまずいので気をつけないとけない。

さて、ある時、親しくしていた邦人から、ニューデリーに空軍博物館があることを突き止めたという話が舞い込んできた。場所はパーラム空軍基地の片隅。しかもそこには旧日本軍の特攻機「おうか櫻花」が展示されているという。なんでまたインドに「櫻

花」が？これはとにかく日本人として行ってみなくてはいけない（本当はただの飛行機マニアに過ぎないのだが）ということで、即刻Japan Aviation Association, India (JAAI)なる任意団体を結成してアポを入れてみた。我々より前にそういう名前の団体があったとしたらごめんなさいだが、会員は自分も入れて精鋭4人だ。あとでわかったことだが、そもそもその博物館は入場無料で誰でも入れてくれたから、そんな団体名を名乗らなくても良かったのだが、その話を持ってきてくれた友人は空軍博物館を永年探してようやく見つけたということで、要は気合いの問題である。

ひどく暑い夏の日午後だったが、JAAIの精鋭4人は勇んでインド空軍博物館を訪問した。博物館と言っても、空港の片隅によくある波板鉄板で囲われたかまぼこ型の格納庫を利用したような建物だ。

中に入ったら、ターバンをきっちり巻いた空軍の大佐が館長だと名乗って、我々を案内してくれた。見ると、おお！比較的入口に近いところに「櫻花」があるではないか！「櫻花」は要するに1人乗りの有翼飛行爆弾だ。全長約6メートル、主翼幅約5メートルの小さい飛行物体である。一式陸上攻撃機の胴体の下にぶら下げられて出撃し、敵の軍艦が見えたら切り離してもらって尾部のロケットに点火して突っ込んでいく。ちゃんと敵艦に当たるように操縦するのがパイロットの役目。第二次大戦でこんな兵器を作ったの



【図1】インド空軍博物館に展示されている旧日本海軍の特攻機「櫻花」（1992年撮影）



【図2】 軽戦闘機ナット：1967年10月16日に発行された第四次普通切手シリーズのうちの1枚（ギボンス#511）



【図3】 図2のニセモノ切手

は日本だけだ。連合軍は日本の軍用機にコードネームを付けていた。ちょうど台風やハリケーンに識別用に人名を付けるのと同じようなもので、例えば一式戦闘機単はオスカーだし、紫電改はジョージ、一式陸上攻撃機はベティだ。桜花には悲しいかな、バカと付けられた。その由来は文字通り「馬鹿」と伝えられている。

館長さんに聞いてみたが、桜花がどうしてここにあるのかはわからないとのことであった。桜花が米国のスミソニアン航空博物館に展示されていることはよく知られているし、靖国神社の遊就館にはレプリカが天井から吊り下げられている。しかし、インド空軍博物館に実物が展示されていることはほとんど知られていないようだ。他の20機ほどの展示機はすべて過去にインド空軍が使用したものが、この桜花だけは違う。不思議な話である。

さて、冒頭述べたようにインドは軍事大国だ。だから軍隊や兵器に関する切手は比較的多く発行されている。空軍関係に絞って紹介すると、まずは、1960年に運用が開始された軽戦闘機「ナット」だ。これは英国のフォーランド社で開発されたが、本家英国では不採用になったものの、インド空軍で使われて成功している。ヒンドスタン航空機

でのライセンス生産も含めて約200機が使われた。その後も独自に改良を施した「アジート」がヒンドスタン航空機で約80機生産されている。遷音速機だが、印パ戦争でも活躍したインドを代表する軽戦闘機で、切手にも何度か登場した。有名なのは、1965年から発行された第四次普通切手シリーズに登場したもの。この切手には裏糊付きの精巧なニセモノが現れており、切手カタログにも紹介されているほどだ。

それから、1958年にはインド空軍創設25周年記念切手が発行された。これには、インド空軍創設時の主力戦闘機ワピティ（複葉機、英国製）と、切手発行当時の主力戦闘機ハンター（英国製）が描かれている。空軍博物館にはこれらワピティ、ナット、ハンターの実物が展示されている。

さらに1982年にはインド空軍創設50周年記念切手が発行されたが、ここにはワピティとともにソ連製の高速迎撃戦闘機ミグ25が描かれている。1976年に函館に強行着陸して世間を騒がせたのと同じ戦闘機である。その後、ミグ27やミグ29、シーハリヤー（英国製）なども切手に登場した。前述したとおり、西側、東側の軍用機が入り混じっていて、飛行機マニアとしては見ていて飽きない。



【図4】 ハンターとワピティ：図1958年4月30日に発行されたインド空軍創設25周年記念切手2種のうちの1枚（ギボンス#398）



【図5】 ミグ25とワピティ：1982年10月8日に発行されたインド空軍創設50周年記念切手（ギボンス#1053）